

(4) 総合主観満足度と分野別主観満足度の関係

総合主観満足度と分野別主観満足度について、相関関係を調べることで、満足度を介した経済社会の構造を分析する。総合主観満足度と13の分野別満足度との関係を、(i)総合主観満足度を被説明変数とし、13分野の満足度を説明変数とする重回帰分析、(ii)総合主観満足度と生活の楽しさ・面白さが相互に影響し合うと仮定し、パス解析による検証を行う。

(i-①)総合主観満足度を13分野の満足度で重回帰³⁵

総合主観満足度を被説明変数、13分野の分野別主観満足度を説明変数として重回帰分析を行った結果が図表3である。「生活の楽しさ・面白さ」、「家計・資産」、「ワークライフバランス」、「健康状態」、「住宅」、「教育水準・教育環境」、「雇用・賃金」、「社会とのつながり」の8分野の説明力が有意であるとの結果となった。一方で、「身の回りの安全」、「自然環境」、「政治・行政・裁判所への信頼性」、「子育てのしやすさ」「介護のしやすさ・されやすさ」の5分野は有意な結果が得られなかった。このモデルの自由度修正済み決定係数は0.626であり、総合主観満足度を当該8分野で62.6%説明できていることを意味する。

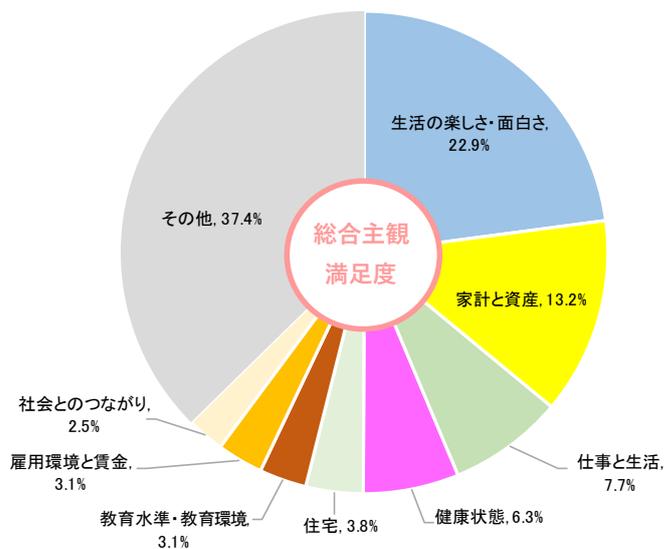
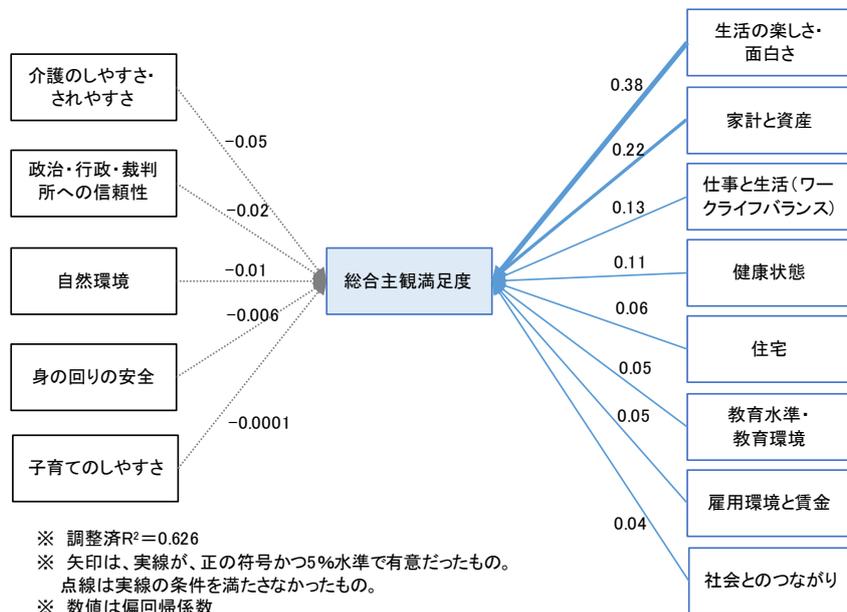
図表3の円グラフは本モデルで説明できている部分(62.6%)を当該8分野の偏回帰係数の大きさに按分することで、総合主観満足度の分野別の構成比を表したものである。説明できていない部分(37.4%)は8分野以外のその他の要因であり、家族などの個人的要因も含まれると考えられる。

本モデルでは、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度との偏回帰係数が一番大きく(0.38)、次に「家計・資産」(0.22)、「ワークライフバランス」(0.13)、「健康状態」(0.11)と続いている。

「生活の楽しさ・面白さ」は、国際機関などの先行研究ではとりあげられていない分野ではあるが、「家計・資産」などの経済面・金銭面から得られる満足度よりも影響度が大きいとみられることは注目に値する。

³⁵ 本報告書で実施している重回帰分析は、自由度が500~10,000程度であるため、|t値|は、信頼係数99%の場合は2.59以上、95%の場合は1.96以上、90%の場合は1.65以上で有意となる。

図表3 総合主観満足度を13分野の満足度で重回帰：8分野で有意となる



(i-②)総合主観満足度を12分野の満足度と「楽しさ・面白さ(純)」で重回帰

他方で、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、①総合主観満足度とそもそも似た概念となっている可能性があること、②他の12分野の効果を媒介して総合主観満足度に影響を与えている可能性について検証を試みた。

まず、総合主観満足度と分野別主観満足度の相関行列を見ると、図表4のとおりである。ここからは、①「生活の楽しさ・面白さ」の満足度と総合主観満足度との相関は0.73と強いこと、②「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、他の12分野中7分野と強めの相関が出ていること、残りの5分野とも中程度の相関があることが分かる。こうしたことから、「生活の楽しさ・面白さ」は総合主観満足度と似た概念である可能性があることが分かる。

図表4 相関行列：総合主観満足度と「楽しさ・面白さ」の満足度の相関が高い

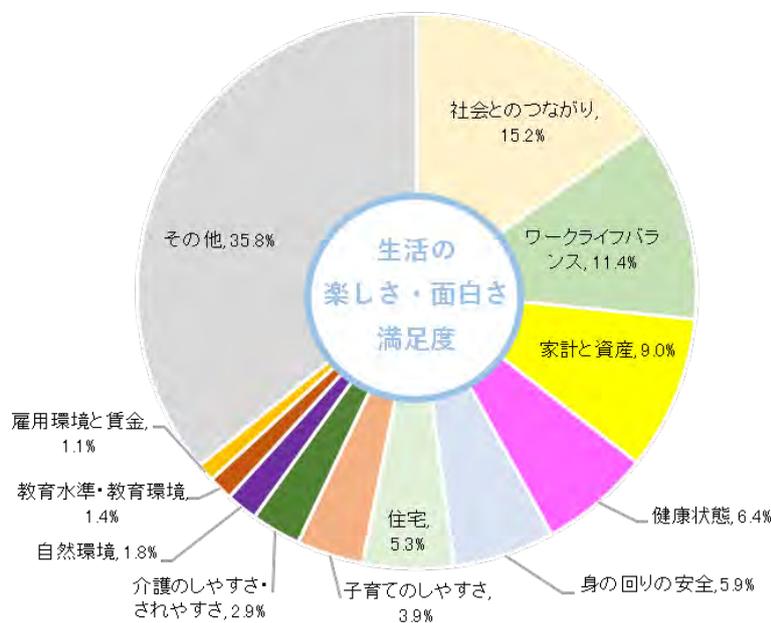
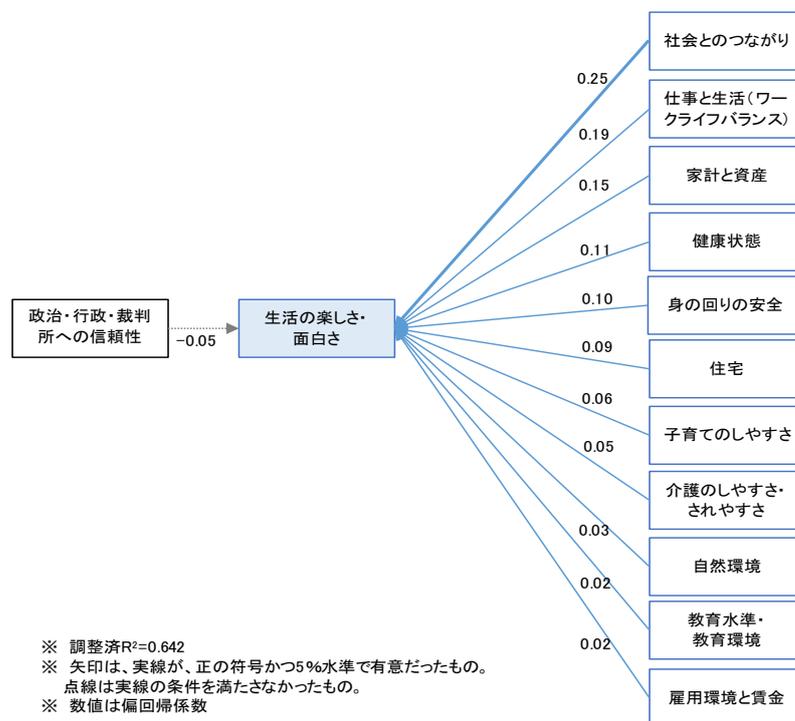
	総合主観満足度	家計と資産	雇用環境と賃金	住宅	ワークライフバランス	健康状態	教育水準・教育環境	社会とのつながり	政治・行政・裁判所への信頼性	自然環境	身の回りの安全	子育てのしやすさ	介護のしやすさ・されやすさ	生活の楽しさ・面白さ
総合主観満足度	1.00	0.67	0.61	0.59	0.66	0.59	0.58	0.58	0.40	0.47	0.51	0.47	0.45	0.73
家計と資産	0.67	1.00	0.74	0.62	0.65	0.54	0.59	0.55	0.50	0.49	0.52	0.50	0.54	0.65
雇用環境と賃金	0.61	0.74	1.00	0.56	0.70	0.52	0.57	0.54	0.51	0.48	0.50	0.51	0.54	0.60
住宅	0.59	0.62	0.56	1.00	0.63	0.52	0.58	0.55	0.40	0.53	0.55	0.49	0.46	0.61
仕事と生活	0.66	0.65	0.70	0.63	1.00	0.62	0.61	0.60	0.46	0.52	0.55	0.52	0.51	0.68
健康状態	0.59	0.54	0.52	0.52	0.62	1.00	0.59	0.58	0.40	0.50	0.55	0.45	0.45	0.61
教育水準・教育環境	0.58	0.59	0.57	0.58	0.61	0.59	1.00	0.64	0.46	0.54	0.57	0.52	0.48	0.61
社会とのつながり	0.58	0.55	0.54	0.55	0.60	0.58	0.64	1.00	0.46	0.51	0.53	0.50	0.48	0.67
政治・行政・裁判所への信頼性	0.40	0.50	0.51	0.40	0.46	0.40	0.46	0.46	1.00	0.54	0.51	0.49	0.55	0.44
自然環境	0.47	0.49	0.48	0.53	0.52	0.50	0.54	0.51	0.54	1.00	0.73	0.54	0.50	0.54
身の回りの安全	0.51	0.52	0.50	0.55	0.55	0.55	0.57	0.53	0.51	0.73	1.00	0.58	0.53	0.59
子育てのしやすさ	0.47	0.50	0.51	0.49	0.52	0.45	0.52	0.50	0.49	0.54	0.58	1.00	0.64	0.54
介護のしやすさ・されやすさ	0.45	0.54	0.54	0.46	0.51	0.45	0.48	0.48	0.55	0.50	0.53	0.64	1.00	0.53
生活の楽しさ・面白さ	0.73	0.65	0.60	0.61	0.68	0.61	0.61	0.67	0.44	0.54	0.59	0.54	0.53	1.00

※すべて1%水準で有意

そこで、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度を他の12分野の満足度で重回帰分析を実施したところ、「政治・行政・裁判所への信頼性」以外の11分野で有意となり、符号条件(符号がプラス)を満たしているとともに、この11分野で「生活の楽しさ・面白さ」の満足度の64.2%を説明している。

特に、「社会とのつながり」(偏回帰係数:0.25)や「ワークライフバランス」(同:0.19)の係数が高かった。

図表5 「生活の楽しさ・面白さ」を他の12分野で重回帰：11分野で有意となる



本結果からは、有意となった他の11分野の満足度が「楽しさ・面白さ」の満足度を媒介して、総合主観満足度に対して影響を与えている可能性が高いことがみてとれる。

分野別主観満足度が、「楽しさ・面白さ」を経由して総合主観満足度に影響を与えている効果を分析するため、「楽しさ・面白さ」の満足度のうち、他の 11 分野の要因では統計的に説明できない、残りの部分(いわゆる「残差」。以後、「楽しさ・面白さ(純)」と呼ぶ)を説明変数として活用することで、総合主観満足度と他の 12 分野の満足度の関係をより明確化できるのではないかと考えた。ここでの「楽しさ・面白さ(純)」は、他の 11 分野に関連しない、より前向きな「楽しさ・面白さ」のコアとなる要素であると考えられる。

総合主観満足度を被説明変数に、「楽しさ・面白さ(純)」と他の 12 の分野別満足度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果は図表7のとおり。

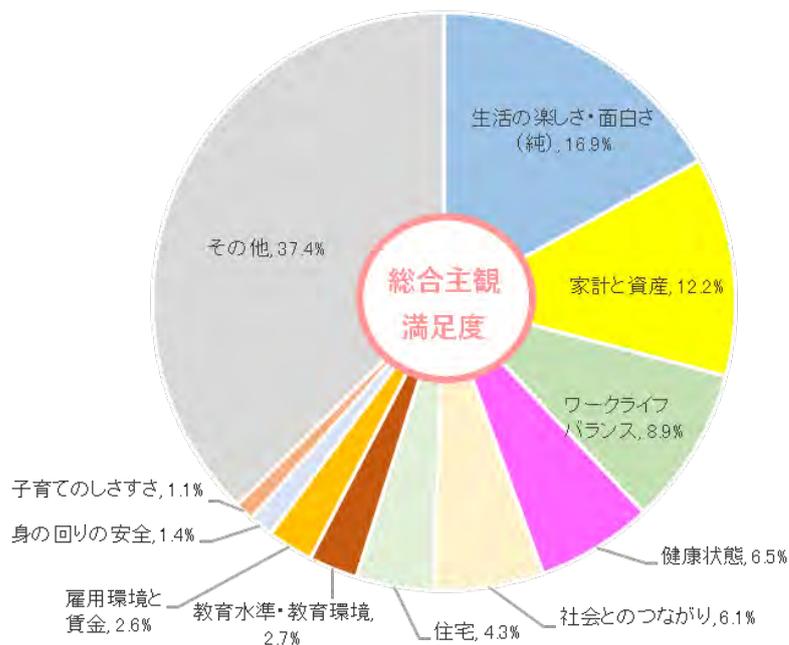
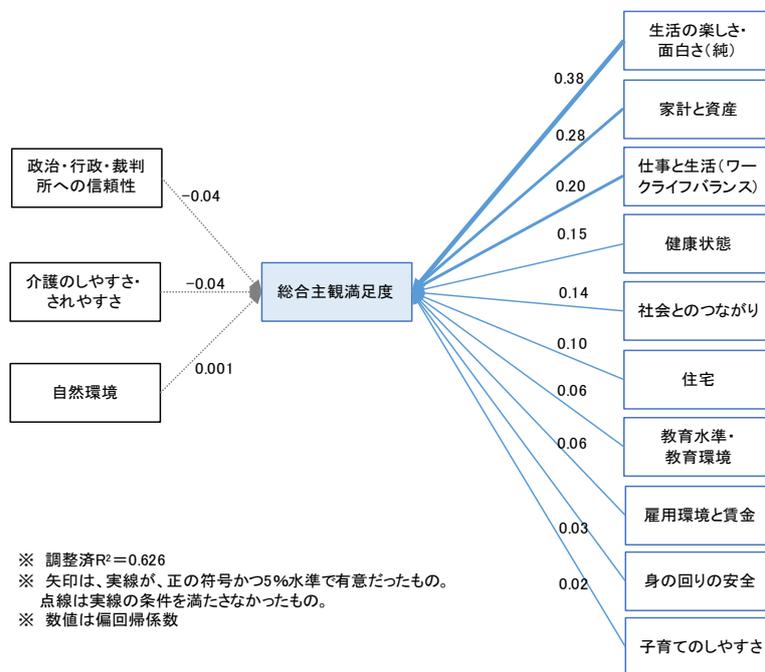
本モデルでは、「生活の楽しさ・面白さ(純)」は、i - ①で用いた重回帰モデルと比較すると、他の 12 分野の効果を媒介することで「生活の楽しさ・面白さ」の効果として計上されていた効果が除かれている形となる。

このため、①有意となる分野が増えること(例:「身の回りの安全」「子育てのしやすさ」が有意となる。)、②有意となったすべての分野の偏回帰係数が高まっていること(例:「社会とのつながり」の係数は大きく増加(0.04→0.14))など、i - ①で用いた重回帰モデルよりは、総合主観満足度と他の 12 分野からの影響がより解明できるモデルとなっている。なお、「介護のしやすさ・されやすさ」、「自然環境」は、本モデルでは、有意とはなっていないものの、図表6にあるとおり、「生活の楽しさ・面白さ」を媒介して総合主観満足度に影響していることには留意が必要である。

なお、「生活の楽しさ・面白さ(純)」は、「社会とのつながり」など 12 分野との相関を除いたものであるにもかかわらず、依然、総合主観満足度との相関が最も高く、重要なファクターであることが分かる。そこで、「生活の楽しさ・面白さ(純)」が具体的にどのような要因を反映しているのかについての検討が必要となる。予備的な検討結果はコラム2で説明している。

図表6 「生活の楽しさ・面白さ（純）」を用いた重回帰

：他分野の係数が高まる。新たに有意となる分野（身の回りの安全）が出現。



<コラム1>ライフステージ、地域ごとに見た総合主観満足度と分野別満足度の関係

ここでは、ライフステージや地域が異なることで、総合主観満足度と分野別満足度との関係に違いがあるかどうかについて検討した。その結果、全体では総合主観満足度との関係が有意ではない分野でも、特定のライフステージ、地域では有意となるなど、ライフステージ・地域ごとに関係の強い分野が異なることが分かった。

例えば、性別×年齢別を見ると、①「住宅」は、女性はほぼすべての世代で有意になるものの、男性は「35歳以降」から有意になる、②「教育」は男性の60歳以上、女性の35～59歳で有意とならない、③「子育てのしやすさ」は男性の25～44歳、女性の15～24歳で有意となっている等である。

図表7 属性別の重回帰分析の結果（性別×年齢別）³⁶

<性別>

	家計と資産	雇用環境と賃金	住宅	仕事と生活	健康状態	教育水準・教育環境	社会とのつながり	政治・行政・裁判所への信頼性	自然環境	身の回りの安全	子育てのしやすさ	介護のしやすさ・されやすさ	楽しさ・面白さ（純）
全体	0.28	0.06	0.10	0.20	0.15	0.06	0.14	-0.04	0.00	0.03	0.02	-0.03	0.38
男性	0.25	0.10	0.09	0.21	0.14	0.07	0.14	-0.03	0.00	0.04	0.03	-0.05	0.37
女性	0.30	0.03	0.10	0.20	0.15	0.05	0.13	-0.05	0.00	0.03	0.02	-0.02	0.39

<性別×年齢別>

		家計と資産	雇用環境と賃金	住宅	仕事と生活	健康状態	教育水準・教育環境	社会とのつながり	政治・行政・裁判所への信頼性	自然環境	身の回りの安全	子育てのしやすさ	介護のしやすさ・されやすさ	楽しさ・面白さ（純）
男性	15～24歳	0.10	0.21	-0.01	0.19	0.14	0.15	0.15	0.03	0.00	-0.02	0.04	-0.06	0.34
	25～34歳	0.26	0.10	0.01	0.16	0.19	0.09	0.15	-0.07	0.07	0.01	0.08	-0.06	0.31
	35～44歳	0.20	0.14	0.16	0.15	0.10	0.05	0.16	-0.04	-0.07	0.09	0.06	-0.01	0.37
	45～59歳	0.30	0.09	0.11	0.27	0.10	0.07	0.13	-0.04	0.03	0.04	0.03	-0.11	0.36
	60～89歳	0.32	0.03	0.11	0.24	0.15	0.00	0.10	-0.02	0.00	0.05	-0.05	0.01	0.40
女性	15～24歳	0.21	0.04	0.03	0.15	0.15	0.11	0.10	-0.02	-0.03	0.04	0.06	0.00	0.34
	25～34歳	0.27	0.04	0.07	0.23	0.20	0.08	0.12	-0.08	0.00	0.02	0.02	-0.02	0.34
	35～44歳	0.29	0.04	0.11	0.16	0.17	0.04	0.18	-0.01	-0.02	0.01	0.00	0.02	0.38
	45～59歳	0.34	0.05	0.16	0.21	0.12	0.01	0.11	-0.07	0.02	0.03	0.01	-0.06	0.45
	60～89歳	0.31	0.00	0.12	0.21	0.15	0.05	0.14	-0.06	0.03	0.05	-0.01	-0.04	0.43

（備考）① 強制投入法による重回帰分析結果、数値は偏回帰係数

② 表欄は、白色：|t値|≥2.0、緑色：1.5≤|t値|<2.0、灰色：|t値|<1.5又は符号条件が合致しないもの

③ 「楽しさ・面白さ（純）」は、「楽しさ・面白さ」の分野別主観満足度を他の12の分野別満足度で重回帰した際の残差

³⁶ 本報告書で実施している重回帰分析は、自由度が500～10,000程度であるため、|t値|は、信頼係数99%の場合は2.59以上、95%の場合は1.96以上、90%の場合は1.65以上で有意となる。

地域ブロック別で見ると、④「北海道・東北地方」では「自然環境」が有意となる、⑤「中国地方」では「子育て」が有意となる、等である。

図表8 属性別の重回帰分析の結果（地域別）

<地域ブロック別>

	家計と資産	雇用環境と賃金	住宅	仕事と生活	健康状態	教育水準・教育環境	社会とのつながり	政治・行政・裁判所への信頼性	自然環境	身の回りの安全	子育てのしやすさ	介護のしやすさ・されやすさ	楽しさ・面白さ（純）
北海道・東北	0.30	0.07	0.09	0.19	0.17	0.08	0.13	-0.08	0.06	-0.01	0.04	-0.06	0.35
関東	0.28	0.06	0.07	0.21	0.14	0.09	0.15	-0.04	-0.02	0.04	0.02	-0.01	0.36
北陸	0.22	0.08	0.08	0.24	0.17	0.01	0.17	-0.07	-0.01	0.07	0.01	0.00	0.33
東海	0.24	0.11	0.13	0.19	0.12	0.04	0.11	-0.06	-0.01	0.09	0.01	-0.01	0.39
近畿	0.30	0.04	0.09	0.18	0.12	0.06	0.14	-0.03	0.02	0.07	0.04	-0.10	0.43
中国	0.32	0.03	0.09	0.14	0.15	0.06	0.16	-0.01	-0.02	-0.02	0.06	-0.01	0.47
四国	0.22	0.09	0.14	0.21	0.20	0.04	0.07	-0.02	0.03	-0.01	0.04	-0.01	0.46
九州・沖縄	0.28	0.03	0.12	0.23	0.13	0.05	0.15	0.00	-0.04	0.02	-0.01	-0.05	0.36

（備考）① 強制投入法による重回帰分析結果、数値は偏回帰係数

② 表欄は、白色： $|t \text{ 値}| \geq 2.0$ 、緑色： $1.5 \leq |t \text{ 値}| < 2.0$ 、灰色： $|t \text{ 値}| < 1.5$ 又は符号条件が合致しないもの

③ 「楽しさ・面白さ（純）」は、「楽しさ・面白さ」の分野別主観満足度を他の12の分野別満足度で重回帰した際の残差

また、⑥「楽しさ・面白さ（純）」が性別・年齢別・地域別問わず、一番説明力が大きい分野である。

このように、ライフステージや地域ごとに、総合主観満足度と分野別満足度との関係は異なることから、人々の生活の満足度を高めるための政策運営を行う上で、ライフステージや地域ごとに焦点を当てる分野を選択するなど、きめ細かな対応が必要であると考えられる。今後、よりの確な政策運営を行うためにも、こうした属性ごとの分析をさらに深めていく予定である。

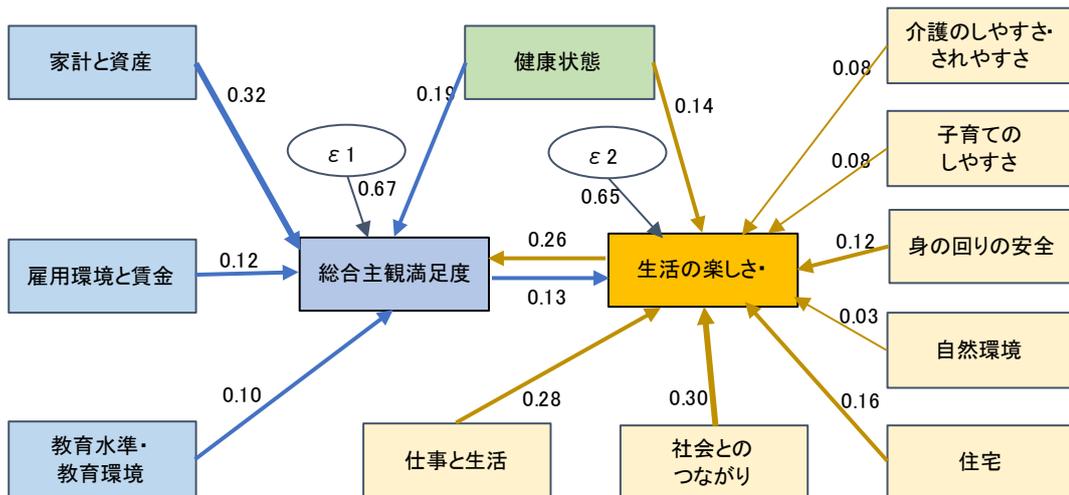
(ii)パス解析

上記の重回帰モデルにおいては、「総合主観満足度」を被説明変数とし、13分野の「分野別満足度」で説明するという単純な構造を仮定したものであるが、実際には、総合主観満足度と13の分野別満足度は、それぞれが相互に影響しあう構造であるとも考えられる。

特に、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度は、上述のとおり、他の12分野の効果を媒介して総合主観満足度に影響を与えている可能性が高く、そうしたことから、「総合主観満足度」と「生活の楽しさ・面白さ」が相互に影響しあって互いの満足度が同時決定するとの仮定の上で、(a)総合主観満足度に直接影響を与える経路、(b)「生活の楽しさ・面白さ」を媒介して「総合主観満足度」に影響を与える経路、(c)両方に影響を与える経路がある可能性を想定し、パス解析を行うことで検証した。

その結果、最も説明力の高いモデルが以下の図表9にあるモデルである。

図表9 パス解析の結果



※ 数字はパス係数。1%水準で有意かつ正符号を満たすもの。εは誤差。

※ R²は総合主観満足度が0.33、楽しさ・面白さが0.35。

総合主観満足度のみ直接的に影響	「家計と資産」「雇用環境と賃金」「教育水準・教育環境」
「生活の楽しさ・面白さ」を介して間接的に総合主観満足度に影響	「社会とのつながり」「仕事と生活」「住宅」「身の周りの安全」「子育てのしやすさ」「介護のしやすさ・されやすさ」「自然環境」
総合主観満足度と「生活の楽しさ・面白さ」の両方に影響	「健康状態」
有意にならなかった分野	「政治・行政・裁判所への信頼性」

この分析から、①総合主観満足度に直接影響するのは、「家計・資産」「雇用・賃金」などの3分野であり、これらは生きていく上で必要な分野(生活必需である分野)であるとともに、その多くは自助努力で金銭的に得ることができる満足度が多いこと、②生活の楽しさ・面白さの満足度を媒介して総合主観満足度に影響を与えるのは、「ワークライフバランス」や「社会とのつながり」などの7分野であり、これらは金銭だけでは得ることが難しい満足度が多いこと、③総合主観満足度と生活の楽しさ・面白さの満足度の双方に効いているのは「健康状態」の1分野のみであることが判明した。

本モデルでは、重回帰モデルにおいて有意とならなかった「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」、「身の回りの安全」、「自然環境」の分野が有意となり、「政治・行政・裁判所への信頼性」以外のすべての相関関係が有意になった。

なお、上記の重回帰分析もパス解析も変数間の線形的関係を前提としたものである。しかし「家計と資産」等については、分野別満足度と総合主観満足度の間に非線形の関係(「家計と資産」に関する満足度が高まるにつれ、その総合主観満足度への影響が小さくなること)が有意に確認された。所得の絶対水準との幸福度や満足度との非線形関係は先行諸研究でも確認されているが、今回の分析で「家計と資産」の満足度との間にもそうした関係が確認されたことは興味深い。「家計と資産」の満足度が非線形の影響を持つことを無視したここまでの分析には歪みが生じている可能性があるため、コラムにおいて、非線形性を考慮した重回帰分析を紹介している。回帰係数には大きな差は認められなかったが、「家計と資産」以外の分野でも、分野別満足度の影響の逓減や逓増が計測されたものがある。

満足度から見た経済社会構造については、上記のモデルですべてを説明できるわけではないが、ここでは、生活満足度を構成する分野として、以下の11分野を選定した。

① 重回帰分析、パス解析とも有意な分野

「家計と資産」、「雇用環境と賃金」、「住宅」、「仕事と生活(WLB)」、「健康」、「教育」、「社会とのつながり」

② 重回帰分析では有意ではないものの、パス解析では「生活の楽しさ、面白さ」を通じて有意となった分野

「身の回りの安全」、「自然環境」、「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」

※重回帰分析、パス解析とも有意ではない「政治・行政・裁判所への信頼性」は除いた³⁷。

³⁷ 「政治・行政・裁判所への信頼性」は、OECDで採用されている10分野の中で唯一効かなかった分野である。属性別(年代・地域別)の重回帰分析でも全く有意とならず、本分野が効かないということが我が国の一つの特徴である可能性がある。

なお、「生活の楽しさ・面白さ」は、総合主観満足度と最も相関が高く、重要な分野であるが、「生活の楽しさ・面白さ」を構成する要素を探求する分析が、なお不十分であること（「生活の楽しさ・面白さ」の客観指標の選定が困難）から、第1章『生活満足度の観点から経済社会構造を「見える化」する』でとりあげることを見送った。今後、検討を深め、客観指標との関連が確認できれば、記載を追加することとしたい。

＜コラム2＞非線形性を考慮した総合主観満足度と分野別満足度の重回帰分析

ここでは、総合主観満足度を、13の分野別満足度とともに13の分野別満足度の2乗項も加えた重回帰分析の結果をみていく。分野別満足度の2乗項を加えたのは、例えば、家計と資産の満足度は総合主観満足度に大きな影響を与えているが、それは、家計と資産の満足度が低い場合も高い場合も同じ程度の影響なのか、それとも、満足度が高くなると影響は小さくなる、もしくは大きくなる、といった非線形性をもっているのかということを検討するためである。

図表10 非線形性を考慮した重回帰分析

	「楽しさ・面白さ」投入	「楽しさ・面白さ(純)」投入
調整済 R ²	0.629	0.630
非標準化係数		
(定数)	0.370	0.415
《分野別満足度》		
1.家計と資産	0.360	0.430
2.雇用環境と賃金	0.091	0.100
3.住宅	0.050	0.087
4.仕事と生活	0.120	0.198
5.健康状態	0.187	0.227
6.教育水準・教育環境	0.053	0.059
7.社会とのつながり	0.073	0.175
8.政治・行政・裁判所	-0.026	-0.044
9.自然環境	-0.058	-0.044
10.身の周りの安全	-0.030	0.008
11.子育て	-0.062	-0.035
12.介護	-0.049	-0.027
13.楽しさ・面白さ	0.408	

13.楽しさ・面白さ(純)		0.379
《分野別満足度(2乗)》		
1.家計と資産(2乗)	-0.015	-0.017
2.雇用環境と賃金(2乗)	-0.005	-0.005
3.住宅(2乗)	0.001	0.001
4.仕事と生活(2乗)	0.001	0.000
5.健康状態(2乗)	-0.008	-0.008
6.教育水準・教育環境(2乗)	0.000	0.000
7.社会とのつながり(2乗)	-0.003	-0.003
8.政治・行政・裁判所(2乗)	0.000	0.000
9.自然環境(2乗)	0.005	0.004
10.身の周りの安全(2乗)	0.003	0.002
11.子育て(2乗)	0.007	0.006
12.介護(2乗)	-0.001	-0.001
13.楽しさ・面白さ(2乗)	-0.003	
13.楽しさ・面白さ(純)(2乗)		0.021

図表10は重回帰分析の結果をまとめたものである。これから読み取れることは以下の4点である。

- ① 「家計と資産」の満足度の総合主観満足度に与える影響は逡減する。これは、家計と資産についての満足度が低い段階では総合主観満足度に大きな影響を与えるが、満足度が高まるほどその影響は緩やかになることを示している。所得や資産がある程度になると、それ以上豊かになってもそれほど満足度を押し上げない現象は、多くの先進国で見られるが、(総合主観満足度と「家計と資産」の満足度という)主観的満足度どうしても、同様な関係がみとれる。
- ② 「健康状態」や「雇用環境と賃金」に関する満足度の影響はわずかに逡減する。
- ③ 「楽しさ・面白さ」に関する満足度については、そのままを説明変数とした場合は、総合主観満足度への影響はわずかに逡減するが、他の分野の影響を除去した「楽しさ・面白さ(純)」を説明変数に入れ替えると、総合主観満足度への影響は逡増する。このことは、純粋な楽しさ・面白さが深まるにつれてその重要性がますます増してくる可能性を示唆しているという解釈もできよう。この点は大変興味深いので、この純変数が高い人の状況についての分析を深めていきたい。
- ④ 2乗項が有意でない分野(住宅、ワークライフバランス、教育、社会とのつながり)については、非線形性が認められない。

(5) 「満足度・生活の質に関する調査」の調査体制と概要

(i) 調査体制

内閣府では、2018年9月に(株)サーベイリサーチセンター(以下「SRC」)への業務委託を行い、SRCの下で、「満足度・生活の質指標群に関する研究会」を立ち上げ、同研究会の意見を踏まえ、2018年度に約10000人、2019年度には約5000人規模のWEB調査(生活の質・満足度に関する調査)を行った。

満足度・生活の質指標群に関する研究会 構成員 (2020年9月11日現在)

猪狩 廣美 聖学院大学政治経済学部特任教授、荒川区自治総合研究所理事
 大守 隆(座長) 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
 領域総括(多世代領域)
 小塩 隆士 一橋大学経済研究所 教授
 亀坂 安紀子 青山学院大学 経営学部 教授
 土屋 隆裕 横浜市立大学 データサイエンス学部 教授

(50音順、敬称略)

(ii) 「満足度・生活の質に関する調査」の概要(①2019年、②2020年)

項目	内容
目的	総合的な主観的満足度及び分野別満足度を調査し、客観指標との関係性を明らかにする。
調査方法	WEB調査
対象者	日本国内に住む15歳～89歳のインターネットパネル登録モニター
回収数	①10,293件(約1万件と設定し、下段の割当数の算定において端数処理を行った結果、10,293件とした) ②5,281件(約5,000件と設定し、下段の割当数の算定において端数処理を行った結果、5,281件とした)
回収数の割当※	地区別、性別、年齢階層別に割当を実施した。 ※割当にあたっては、母集団をできるだけ反映するとともに、都道府県別結果の標準誤差を抑えるため、均等割当と人口比に応じた割当を組み合わせた。 ※2020年調査では、プールドデータとしての分析を行うため、モニター数を15,000件(2019年:10,000件+2020年:5,000件)として基本的に2019年と同様の方法で割当を行った。 ○地域区分:47都道府県に10,340件を均等割当し、5,234件を人口比に応じて割当 (1県当たり249～763件:均等220件+人口比29～543件) ○性別区分:47都道府県に男女各5,170件を均等割当し、5,234件を人口比に応じて割当 ①男性(1県当たり124～378件:均等110件+人口比14～268件) ②女性(1県当たり125～385件:均等110件+人口比15～275件) ○年代区分:①15～24歳(1県当たり48～107件:均等男女各44件+人口比男女計4～63件) ②25～34歳(1県当たり48～130件:均等男女各44件+人口比男女計4～86件) ③35～44歳(1県当たり48～146件:均等男女各44件+人口比男女計4～102件) ④45～59歳(1県当たり50～169件:均等男女各44件+人口比男女計4～125件) ⑤60～89歳(1県当たり55～211件:均等男女各44件+人口比男女計11～131件)
調査期間	①2019年1月25日(金)～2月7日(木) ②2020年2月7日(火)～2月20日(木)
質問数・項目	○質問数:合計35問(質問が分岐するため、実質の質問数は増減する) ○項目:①生活全体の主観的満足度、②生活分野別の重要項目、③生活分野別の主観的満足度、④各生活分野の重要度、⑤属性及び生活実態